
物体Aの職務

あおかな

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

物体Aの職務

【NZコード】

N5538S

【作者名】

あおかな

【あらすじ】

ある日の休日に母親に命令された主人公　脩一は蔵掃除に向かう。そこで出会ったのは物体Aだった。
物体Aの奴隸（たぶん部下）になった主人公脩一は物体Aから頼まれる頼み事を解決していく

いち・なんかいました。

いち

まさかこんな所に、真面目にこんな奴がいるとは誰が思つただろうか。

観測記録至上最高温度を観測するのではないかと思つほどの気温が十一時前というのに高かつた。脩一は暑さで鈍くなつてゐる身体を起こして、窓越しに外を眺めれば暑さで空気がブレて見える。げえつと思いながら俺はお昼のニュースで流れるだらう光景を脳裏に浮かべた後、考えるのを止めた。そして、顧問の都合に大いに感謝した。

脩一はテレビをBGMがわりに週刊少年漫画雑誌を読んでいた。ゴールデンウイーク中なので、合併号の週刊少年漫画雑誌。速く続きを読みたいと思いつつ、普段読んでいないマンガでも読むかとページを捲つた。

そして、ドアノブが回つたのを確認して、漫画雑誌から教科書に持ち替えた。ノック無しに開けられたドアから母が入つてくる。母は持つてゐる教科書と傍に置いてある漫画雑誌を一瞥した後、盛大な呆れ混じりの溜息を吐いた。

「……マンガを読むのも良いけど、バレバレの行動はしない方がいいんじゃないの？」

「あはは」

「あんた、ヒマよね？ どうせ家にいたつて、ゴロゴロゴロゴロと寄生虫とかダンゴムシみたいに転がつて、ただ飲み食い寝て過ごじ

てこるなら体力も有り余つてこるよね?」

最初は何事かと思った。部屋のドアにいる母親は今から田んぼへ行くのか、もんぺを穿きポケットからは「ム手袋を忘れさせてこる。頭には麦わら帽子、首には日焼け防止を兼ねた手拭いが巻かれていた。日焼けはしないし、汗は拭えるわ、手を拭けるわで重宝している農作業をするためには必須アイテムである。

今はそんなことはどうでもいいのだ。

脩一は母から田を逸らして、身体を起こして体育座りでテレビにて意識を集中しようとした。

「寄生虫とかダンゴムシも起きたばつかで動くのはつらいんだ。今だって寒かったら、すぐになぐらに帰つて冬眠したいくらいだ……」「ヒマなんだよね」

いつの間にか、テレビの前に立つて主電源を消す。主電源どころか、テレビ線とコンセントの両方を引き抜くと母はぽいっと後ろに投げ捨てた。

同時に母の「ひ」と避けられないことを悟る。次に起こる出来事はすぐに予想がついた。脳内でショミレーションがなされ、脩一は顔色を蒼褪めた。

「ヒマです、ヒマです! ヒマすぎて、日向ぼっこでもしようかと考えていたところだけど、今すっじく手伝いたい気分です、はいっ!」

がつくんがつくん首が縦に動き、必死に肯定しようとした。ここまではないといけないわけでもないが、今は静かに素直に従つていた方が自身のためだと思ったからだった。体育座りから正座に座り直して、母に向き直る。大量の冷汗がダラダラと背中だけでなく身

体中に流れ、脩一は背筋はピンと伸ばした。

「ほんに天気が良いのだもの。いつもは部活に使っている体力も大量に有り余つていいのだから物置の掃除くらいへっちゃらよね？」
「……へ？」

母は振り返つてガラリと部屋の窓を開け放ち、眼下に見える蔵もとい、物置を指差した。

ビシイと擬音がつくほどに指差した母は息子がハウスダスト持ちだということをよく分かつているはずなのに非常に過酷な指示を下したのだった。

脩一は聞き間違いだと信じたくて、もう一度その指示を聞きたくて惚けた。

「『へ？』だなんて間抜けな声出さないの！ もう一度言つから耳の穴かつぽじつてよく聞きなさい。天気がいいから物置の掃除をしてきて。ちゃんと窓を全部開けて。見間違えるくらいにピッカピカになるまで」

「あー一パーセントも雲がない、綺麗で爽やかな青空だなあ。どこの海を映しているんだろうなあ……」

正座して、母の後ろに見える窓から空を見て言つ。

「（）飯抜きにされたくなかったら、さっさと行つて来い。田んぼの手伝いと掃除どっちがいい？」
「…………掃除させていただきます」

田んぼの手伝いとは酷だ。超重度のアレルギーだったら、迷わずに田んぼの手伝いに向かうのだが、家から近くて掃除しなくても分からない物置に行けばいいと思ったからだ。体力は有り余っている

のだが、掃除の方がはるかに楽だらう。

脩一は楽な方を選んだのだ。

ドサリと掃除用具を床に置き、俺はポケットの中に入っていた防塵マスクを取り出して口元、鼻を押さえて耳にかけた。普通の綿製マスクではとても防げないほどの埃と塵が部屋で舞っている。

肉眼で確認できるほどに舞っているのだから、ハウスダスト中でもダニ、埃、ゴキブリのフンに過剰に反応する脩一の鼻は耐えてくれないだろう。

この防塵マスクはアレルギー性鼻炎の俺にとって、掃除の時は欠かすことのできない必須アイテムだ。ハウスダストと杉花粉という最強のアレルギーコンボを持ち合わせている少年にとって「ゴールデンウィークは最大の敵。家に籠もって花粉やら埃やらが大量に舞っている外へ出ずに空気清浄機で洗練された良い空氣の中で、ダラダラ過ごすのが例年通りになるはずだったのだが、今年は様子が違つた。

そんなハウスダスト持ちの脩一に対し、この物置の掃除をしろといふのは非常に過酷なものだが、指示してきたのが母なので逆らうことはしないのが賢明な判断だ。

季節は杉花粉が猛威を振るうのを止め、代わりに俺が登場してやつたからには喜べと患者数が増えている檜花粉が飛びに飛んでいるゴールデンウィーク。ゴールデンウィークは部の顧問が旅行に行くからという理由の下、中止となつた。その行先が花粉のない北へ行つたのだから顧問もまた花粉症で悩んでいる口なのだろう。全くもつて同情なんとしていていいが。

母の命令に逆らえない、逆らわない脩一は完全防備の中で物置にやってきたのだった。こ汚いを通り越して、どこまで掃除しなかつたらここまで汚くなれるのか不思議に思えてくるくらいに汚かった。

どうせ物置の住人がいなくなつてから掃除という掃除はしていなのだろう。離壇やら五月人形、歎の生えた鯉のぼりが置いてある

辺り、我が母親のズボラさを認識せざるを得ない。

そういえば最近、雛壇やら五月人形が飾られなくなつたなと思つた。五月人形とか鯉のぼりとか今の季節に合つたものなのに。雛壇は飾らなくとも、妹や姉が嫁に行けなくともいいのかと余計な心配をしてしまう。その前に捨てるものは捨てればいい。

脩一はとにかく窓を開けることにした。物置と言つても一軒家を土足にし、家に納まりきれない物々を押し込んでいたら、いつの間にか物置と化していた。とでも言い訳していくのだろう。

一軒家に住んでいたひい祖母が知つたらどう思うのだろうかと脩一は思った。かなりの潔癖症だったと聞いているからだ。その曾祖母が祟つて出てきたらどうするのだ。

コーレイや科学の力で立証できていないものについて脩一は一切信じない主義である。なので、非科学的な何かが出てきても知らないフリをして、受け流すつもりだ。

みしりみしりと老朽化した物置内を進み、窓の枠に手をかける。ぐつと窓を開けようとするのだが、固くて開かない。そういえば建物自体が歪んでいて傾いており、窓が開かないと我が母親が言っていたような気がしてきた。

「開かんかい、このやうつ……」

指に力を精一杯入れて窓を開けようとする。建物が左に傾いているから開かないのは当然なのだが、ここまで開ないと意地でも開けたくなつてくる。元来の負けず嫌いが発動した。こんな窓一つに負けず嫌いを発動しないで、別のことを使えと言われようが今はこの窓を開けたかったのだ。

「その窓、開かずの窓だから開かないわ

「開かずの窓なんて建物を建てる時にできるわけないから絶対に開く！ 窓が開かなくて窓は何の役目を全うするというのだ！！」

否定されて、くわつと顔を真一文字に歪ませて脩一は叫んだ。
「ん？ ようやく我が名を聞いてくれるか。我が名は……」

話が違ってきていなくもないが、そんなこといちいち氣にしていられない。

もう一度、窓の様に手をかけて開けようとしてみる。ギチギチ指が鳴つて、窓より云々、自分自身の指が悲鳴を上げるんじゃないかと思えてくるほどだった。

「建てている時に歪んでしまってそれを気付かずに完成まで持ち込み、入つてみていた窓を開けようとしたら開かない……だなんて、あり得る話じゃないか。今みたく平行か調べる測定器なんてない時代だつたんだ。適当に誤魔化したつてそんな氣にするような時代ではない。一応、ビーベ玉転がしても分からない傾きなんだぞ」

「…………といひで、お前誰だ？」

ようやく訊ねる。

家の敷地内には脩一しかいないのは朝起きて、リビングに入った時に知っていた。この物置にも何か物を取りに来ない限り、誰も近づいていない。むしろ、近づくなと言われたぐらいだ。

だから今、脩一の目の前にいる少女というか幼女というか。年齢はおよそ十一歳くらいの少女はいてはならない存在だ。

存在を否定したくはないが、この少女だけは否定したかった。ぐりっとビー玉のように瞳は大きく、零れ落ちてしまいそうだつた。するりと腰まで伸びた黒髪。おかげば頭だつたら間違いなく、コケシやら市松人形だといじめられていたらどう。

伸びた黒髪は金髪だったら、違う人形に姿を変えていたと思われるウーブばかり、まず乾かすのに苦労するだらうとあらぬ心配をしてしまった。

「悪靈たいさーん！！！ 名前なんて名乗るなああ！！！ 僕を異世界に飛ばす氣か！？ そつなんだろ、そつなんだな！？ この魑魅魍魎物体Aめーー やつさと正体を表せーー その前に俺、夢から覚めろーー！」

持っていた雑巾を少女 命名、魑魅魍魎物体Aに投げ付ける。ボロ雑巾の中から更に厳選して選ばれた晴れある雑巾は物体Aを通過する。

顔に向かつて投げたはずなのに雑巾は物体Aの顔面を通過し、ぼとつと呆気ないほどに床に落ちた。

「名前を聞かんか。このボケがーー せつかく恐れ高い我が名を名乗つてやろうとしてやつたのに、貴様は聞こうともしないのか。貴様の耳はただの飾りなのか。我の綺麗で美しい声を聞くこともできないのか。飾りなら我に献上したまえ」

物体Aは何処からともなく、稲刈り鎌を取り出してきた。毎年使われているものだから刃こぼれなどしているはずもなく、ライトを当てたわけでもないのにキラリと光つてみせた。

「聞いてます、すみません。さつさと名乗つてくださいませ」

棒読みに言つと顔を顰めて、下から睨みつけてくる物体A。下から睨みつけてきても怖くない。むしろ可愛いと思つくらいだ。

「貴様、感謝しているのかしていないのか。聞きたいのか、聞きたくないのかはつきりせんか！ 優柔不斷な男は昔からモテないと決まっているのだぞーー？」

「俺、一生一次元のキャラが嫁だから関係ありません。ゲームな世界大好きーー次元わつほーい！！！」

「一回滅ぼされたいのか？ 貴様がそういう願望があるのなら問答無用で叶えようぞ」

「願つてもいません。叶えなくていいです。そのままお陀仏してください。俺のためにも閻魔大王サマの所にまっすぐ還つてください」

「何を！ 我は閻魔大王と並ぶ神ぞ！ 我もまた八百万の神々の一神なのだ！ 本来ならば敬れる立場にあるのだ！！ 貴様も態度を改めよ！！」

「じゃあ、敬う立場にあるのなら俺でも知っているカミサマの名前でも名乗り上げるのが妥当だろうが！！ この魑魅魍魎が！！」

「聞いて驚け、そして敬え。我是この山を統べる神ぞ」

「……俺、耳が悪くなつたらしいです」

脩一は何も聞かなかつたことにして掃除に戻つた。くしゃみを一発盛大にしてから、バケツに入つた雑巾を取り出して窓拭きを始める。

ぎゅつぎゅつと雑巾と窓が擦れる音だけが響く。脩一はなるべく物体Aを見ないようにして、床を磨く。埃がマスクの隙間から入り、鼻がむずむずした。

不快極まりない。

「畠田脩一『かまたしゅういち』、我を見よ」

「ぐへつ！！ 何しやがんだ、この魑魅魍魎物体Aが！！」

「貴様が我のことを見ないからだらうが！！ 素直に見れば良かつたものを……」

「俺は忙しいの！ この物置の掃除をしなきや我が家の大魔王に殺されるの！ 育ち盛りの少年にご飯抜きで十八時まで腹を持たせるのはきついものがあるんだぞ！？」

コンビニへ行くにしても車で往復三十分は掛かる距離に家はある。自転車だと片道二十分の距離。その行程をこなすためには家が所有

している田畠の前を過ぎなければならぬし、急な坂を下らなければいけなかつた。

その坂の両脇を固めるのは杉並木。最大の敵を両脇に携えて通らないとコンビニへは行けない。「ゴーグル、マスクをしたとしても家に着いた時、服についた花粉を落とす作業が俺を待つてゐる。自分から危険な道は避けて通つてきたのが脩一だ。

今回もコンビニへ行こうとは全く思わなかつた。

毎朝炊くご飯は大抵タコ飯で食べ終わつてしまふし、乾麵やカツラーメンが家にあるかと言えば皆無だ。もしかしたら階段下の簡易物置にあるかもしけないが、脩一が勝手に入つていい場所ではない。キッチンを管理下に置いてゐる母の許可がないと基本的に物置に入ることは出来ないのだ。

よつて脩一がベッドの下に隠し持つてゐるスナック菓子を食べて次の日の朝まで堪え凌ぐしか方法は残されていないのである。

食べたことがバレるイコールスナック菓子を隠し持つていてがバレるから脩一にとつては死活問題だが、何かしら食べないと眠れないのでバレるのを覚悟して食べる。次の日、涙を飲むのはもちろん脩一自身だ。

家の事情を知るわけがない物体Aはふんと鼻で嘲笑い、切つて捨てる。始めから存在していなかつたように扱つたのだ。

「我には関係ないことだ。貴様は我に土下座して泣き叫んで跪いていればいいのだ。そうだ、我は鳴き声が聞きたい、何か声真似しろ」「んじや、物置に住んでるネコの鳴き声を…ふにゃーー！」

「おお、やれば出来るではないか！ もつとやるのだ！ 我を楽しませよー！」

脩一がネコの鳴き真似をすると物体Aは無邪気に笑つた。姿を現わしてからというものの、謙遜な態度を取つていた物体Aと違った姿を見れたことが嬉しくて、脩一はふと今朝父の行動を思い出した。

「え、次は……親父が毎朝ご飯をやつてくる甘えてくる雀のモノマネでも……つてちげええええええ！」

「乗り気だつたから見せてくれるのではなかつたのか。良いノリツツコミだつたぞ」

「俺、そんなに芸達者なつもりは一切ないんですけども」

「十分芸達者の部類に値するぞ！ 我を楽しませるためにもつと芸を積むのだ！」

「そんな無茶な！」

「人間頑張れば出来ない声などないのだ！ 芸を積めば誰だつて奇怪な声を出すことだつて出来なくもないわ！」

無茶ぶりを振つてくる物体Aに俺は尤もなツツコミを入れた。

「物体Aに言われたくねええええええええええ！ 大体、お前人間じやないくせして俺にそんなこと言つて良いのかよ！？」

「人間じやないからこそ、言う権限があるのだ！ 我は人間以上の知能を持つた優秀な神ぞ！」

「その人間以上の優秀な知能を持つた神ならなんでこんな片田舎の家の物置に居るんだよ！？ おかしいじやないか！？」

「……よくぞ聞いてくれた。我は貴様の曾祖父が川から拾つてきた石に封印されていたのだ。敷地内を守護してくれる信じていたようだな。今はそうだな、ほれ。敷地内の柳の木近くに石祠がある。我は其処に祀られているのだ。石本体は田の傍に道祖神として大切にあるな。田しかないど真ん中に柳の大木があるのを知らんのか。貴様の通う学校の傍にあるだろう？」

ふふふと不気味に三日月に口元を歪めて嗤つと物体Aは流暢に語り始めた。脩一が聞きたいこととは大きく逸れてしまつていて、我が家が常軌を逸脱した家なのかと疑いを持った。

物体Aが言う家の敷地内にある石祠は大切に手入れされているし、
脩一はその石祠に興味関心もなかつたので、幼い頃に扉を開けてし
まつことがあるくらいだつた。

「我が家つて一体」

「ただのしがない農家だろう? 時計が身近になかった頃、人々は太陽の位置で時間を把握したりした。貴様の祖先も同じだったのだろう。石が拾われた時は大旱魃が遭つてな、川の水も枯れてしまつたのだ。その時に祈る思いで川にあつた石を持ち帰つて崇めたのが始まりだと曾祖父は言つていたよ」

「じつちゃんに会つたことあるのか?!」

「実際にはないぞ。毎日農作業を終えてから我の元に通つていたのだ。本当に熱心なほどに我に語りかけておつたわ。くだらないことから貴様が誕生したとか。青臭い話も聞いて我は余興を楽しんでいたものだ……」

感慨深いと言つたようにうんうんと頷きながら語る物体A。この家に来た理由が祖先によつて拾われてきた石に封印されていたといふ。

聞きなれないことだらけで脩一はパンクしそうになつてしまつたが、一つだけ引っかかることがあつた。

「ん? 物体A、お前封印されていたんだろ? 封印されていたのに何で此処にいるんだ?」

「おお! 忘れておつたぞ!! 貴様は我と波長が合つよつでな。ふとした瞬間に幼かつた貴様は我の石を触つていたようだ。その弾みで我的封印が解印されて今に至るというわけだ。物置にいたのは貴様の母も了承済みのことだぞ。ゴールデンウイークにも関わらず我の家の掃除をせぬから夜な夜な夢枕に立つたら貴様を寄越したというわけだ」

「それって神様がすることじゃないと思うんだが」

「まあ、貴様が来たことで我的封印は完全に解けたということだ。

感謝するぞ」

「感謝されても嬉しくも痒くもないんだけど。俺はどう反応すれば良いんですかね」

「だからその感謝のために我は貴様を下僕にすることを決めたぞ」

「…………は？ 下僕、だと…？」

間抜けな声を上げてしまった。

「そうだぞ、光栄に思いたまえ。神が人間を下僕にしたのは平安時代前期に閻魔大王に仕えた小野篁以来の快挙ぞ」

「それって喜ぶべきなのか？」

昔の偉人の名前を言われても俺は反応に困った。小野篁の名前はもちろん脩一も知っていた。

脩一の家には昔の偉人大辞典ならぬ辞典があり、暇な時は読んでいた。小野小町の次に小野篁の名前が有つたなと思い出したのだ。だが閻魔大王は冥界の王。死者が六道への道を行くための裁きの番人として著名な神の名前だ。著名な神に仕えるのは誇つても良いだろう。

だが誇れと言っている傲慢な自称神だと言い張る物体Aは著名な神である保証は全くない。悪靈がコネを使って神に上り詰めたかもしれないし、人間を信じ込ませる口実で自身は神だと言っている新興宗教の教祖と同じだと脩一は物体Aのことを思っていた。物体Aが神だと全く思っていないのである。

それに脩一は神をもつと気品のあるものだと思っているので、こんな傲慢な自己中心的な態度を取っている物体Aが何と言おうと信じるつもりはなかった。

物体Aが脩一の前で神事を行い、実現したならば多少は信じるだ

ろうが、まだ悪霊程度の認識である。

自分の存在を気付かせるためだけに夢枕に立つなど悪霊のする」とだし、注意を向けるなら別のことでも可能だ。人間は幽霊や神の姿を直に見るのは叶わない。だからこそ夢やら金縛りなどの現象を起こし、たまに視野が向いている者を見付けて頼るのだ。

確かにお墓が汚くなっている時は妹や姉、母の枕元に曾祖父が立つては何かを訴えるような視線を寄越してくるのだと朝から会話しているのを聞いたことがあつたし、実際にお墓に行つてみると故意に荒らされたと言つても過言じやないくらいに雑然としていた。普段幽霊だとか UFO と言つた超常現象に興味関心を示さない父や脩一も驚愕した。

父は信じていないと言つていたが、脩一には驚いているようじで見えなかつた。

それよりも。

「え？ 僕、下僕確定なの？」

「貴様の耳は節穴だつたのか？ 耳穴の掃除をきちんととしているのか。北方系だと放置しておくと耳の聞こえが悪くなるぞ。貴様の祖父が良い例だ。半年耳穴掃除をサボつたせいで耳の聞こえが悪くなつてゐるではないか」

「耳穴掃除はちゃんとしますつて。お前は何様のつもりだよ。母さんみたいな口叩くな」

「何様かと神に向かつて聞くのか。聞こえなかつたのならば耳元で言おうぞ。我是八百万の神々の一神ぞ！」

「いてえ！！ 耳元でデカい声で言つな！ 僕の鼓膜をぶち破るつもりか！？」

「破るつもりで言つたのだ。聴覚は視覚と同じで脊椎を通らず直接大脳へシグナルを送つていいからな。貴様のような空の脳みそに伝えるにはこれくらい大声で叫んだところで脳みその働きが誤作動を起こすことがあっても、壊れはしないだろう。……たぶん」

「たぶんかよつ！…」

「おお、貴様はノリツシ「ミミ」が良いな。将来は漫才師になるが良い。そして神有月に出雲へ向かつて他の神共に芸を見せるのだ。さすれば我の評価も上がるわざ！」

「自分の評価のために俺を利用するな、迷惑千万だ。それに他の神共なんて言つていいいのか？ 罰が当たつても俺は知らんぞ」

はあと溜息を深く吐いて拭き掃除を続ける。脩一の横に置かれている汚れたバケツの中に沈んでいる雑巾を摘まみ上げては落として、物体Aは遊んでいた。

脩一は横目に汚れた水が目に入つたら強烈に目が痛いんだぞと思つたところで、物体Aは物質を透過してしまつから関係ないのだと想い、掃除に専念する。

「何だ、心配してくれているのか。貴様に心配されるほど我は落ちぶれていないわ。貴様は忘却しようと必死のようだが、我もまた神なのだと。他の神の呼称など我の好きなように呼ぶぞ」

「いや、同じ神同士だったとしても敬う精神を捨てちゃいけないと思うんだけど」

「そんなの我の勝手であろう。貴様に指図される筋合いなどないわ」

ぱしゃっと掬っていたバケツの水を掛けてくる。至近距離の中です脩一は避けることも叶わず、諸に顔面に水を被つた。ぽたりぽたりと髪から滴る水に物体Aは腹を抱えて笑っていた。

「！ つづく…………」のつ何しやがんだ！！

「我を無視して掃除なんぞするからであります？」

悪気は一切ないと言わんばかりに胸を張つて言う物体Aに溜息を吐いた。すうっと大きく息を吸うと脩一は怒鳴り付ける。相手が神だろうが地縛霊だとか怨霊の類だろうが関係なかつた。

「ふざけんのもいい加減にしろっ！！ 聞いていれば、お前が掃除しきつて祟らなければ俺は此処に来なかつたのに！！ 掃除してくれることをありがたく思えやつ！」

「神に対しても冒涜する氣か！」

だんつと足を踏み鳴らし、肩を掴むとガクガクと揺らす。ガックンガックン首が揺れ、視界もぶれて気分はコーヒー・カップに乗ったような吐き気が俺を襲つ。

脳みそが溶けて、ぐちゃぐちゃに混ざり合つていくようだつた。

胃を通過して、十一指腸で消化して小腸に差し掛かっているである
う朝ご飯の中身がじつそりと飛び出しきそうだ。

とりあえず脩一は部屋に置いてあるポテトチップスを食べなくて
良かつたと思うのだった。吐き気を堪えて物体Aの腕を掴むと無理
やり手を離れると一定の距離を取った。

「つーだから、俺はお前を神だと一切思っていないと何度も言え
分かるんだつー!! 神というなら証明の一つや二つあるだろ? がー!
! 託宣証明書だと、他の神を引っ張つてくるとか、超常現象を
起こしてみるとかー!!」

「託宣証明など貴様の身分からして見れるものではないわ
「だったら他のことをしゃがれ」
「我に命令するでないわ」

ぴしゃりと脩一の言い分を跳ね退ける物体A。

「理不尽すぎるー。俺に人権や主張権すらも与えてくれないとこ
のかー?」

「始めから貴様に人権も主張権など与えてないわ。それすらも気付
かないほどに低能なのか?」

はんと嘲笑い、物体Aは小馬鹿にするよつて脩一を見下した。

「そりゃあ俺は下から数えた方が速いけどよ……て、何で存在が分
からない奴に俺の成績の話をしなきゃいけないんだ。俺はまだ発達
途中で脳みその細胞も活発に動いている!」

「ああ、もつづるとい。口を噤め。貴様がそんなに超常現象が見た
いと言つながらば、貴様のために願いを一つだけ叶えてやるつではな
いか」

両耳を手で押さえて物体Aは頭を振った。ぱさりぱさりと日本人形のようになに長い漆黒の長い髪が左右に揺れ動く。

「……さつき人権を与えてなかつたよな、この流れでいきなりそうなるのかな？」

「いきなりなどではないわ。我は貴様のために願いを叶えてやろうう」という気分になつただけだ。ただの気まぐれの一部にすぎんわ」「いやいやいや十分いきなりすぎるつて！！下僕がどうなつて願いを叶えてくれるまで昇格したのか俺には微塵も理解出来ないんですけど！…それに気まぐれってアンタ本当に神様かよ！？」「…」

「我を疑うというのか！？」

キツと睨みを効かせてくる物体A。脩一の中では既に物体Aは神様ではなく、悪さを持つた地縛霊に絡まってしまったのだと思つていた。そして信じたくなかったが靈と言つた超常現象の類を見る原因となつた物体Aを恨んだ。

「実体もないし、証明がなければ俺は信じないタイプなんだよ！誰か神様だと証明出来る奴を連れてくれば、俺も認めてやるよ！…」

「貴様、下僕の癖して我を疑う氣か！？ 貴様には信仰心というものが存在しないのか！？」

「存在したら跪くくらいになつてるのが道理だと思わないのか！？」

「？」

「……分かつた。貴様を信じさせるには我を証明する者を連れてくれば良いのだな？ 此処で待つておれ。今連れて参るわ」

ぞんざいに威厳を放つた声色で物体Aは言つと忽然と姿を消した。

「消えたし。本当に消えたし。アイツ、本当に神様だつたのかな…」

「…」

脩一は母の命令を最大限尊重したいので、物体Aが再び現れる前に物置の掃除を済ませる。

始めからその場に居なかつたモノがなかつたのだ脩一とは自分に言い聞かせて、物置を後についた。

GWがあつとこゝろ間に過ぎていつた。

後半のGWは実に散々なものだつた。花粉症持ちにも関わらず、物置掃除が片付いたと思つたら人手不足だといつ田植えに繰り出された。

母は脩一が花粉症で苦しんでいることを知らないんじゃないかと思うくらいだ。父もまた脩一より酷くはないが花粉症持ちでマスクをしないで、鼻水を垂らしながら田植えをしていた。聞くと暑いし、もうこんな習慣なのだ。とか言つていた。外にいれば身体が順応して、感覚が鈍くなるのだろうか。

脩一は感覚を鈍らしてまで花粉症と闘いたいとは思わなかつた。田植えで真っ黒に焼けた脩一は今度は日焼け痕と格闘することとなる。何でこんなにまで皮膚機能が残念までに機能していないんだと脩一は恨みたくなつたが、恨むのもよくないと思い我慢した。

マスク焼けをしてしまつた脩一は恥ずかしいがためにGW明けの初日からマスクを外せない。給食の時間はどうつかと考へて、今から考えただけで憂鬱極まりなかつた。

はあと盛大に溜息を吐くと前の席に座つてゐる桑山健くわやまたけるが話し掛けてくる。

「なんか脩一、GW前よりも黒くなつてね？ 鼻の下とか赤くなつてるし」

「人が気にしていることを言つお前の感覚が信じられねえよ……」

げつそりとした顔で健を見ると、健はけらけらと笑つた。

「ま、大方田植えでもしてたんだろ？ アレルギー持ちのオンパレードを持っている奴にとつて田植えはきついよな～」

「暢氣に言つてゐるけど、俺と変われ。前半は物置の掃除をさせられていたんだが」

「すげえ鬼畜だな！ 僕だつたら断固拒否して、逃亡するわ」

「逃亡したくても外は花粉が俺を待つてゐる、田植えでは花粉と闘う、物置はハウスダストでくしゃみが止まらない。この苦しみが貴様に分かるかつ……！」

ぐつと健の肩を掴んでがしがし振る。

「分かりたくないし、花粉症に罹りたいと思わないな」

「健、分かつてないな……花粉症という人類最大の強敵はいつ発症するか分からぬ病気なんだぞ！ 貴様も気を抜いていれば……」

急に鼻がむずむずし、盛大なくしゃみを一発する。

暑いという理由でクラスメイトの一人が教室の窓を開けたようだ。学校の裏は杉林が広がつており、花粉症に罹つてゐる者にとつては堪らない立地条件なのだ。

ガタリと立ち上がると脩一は窓を閉めに向かう。その間くしゃみが全く止まらない。くしゃみを連発し、目が充血してゐる脩一を見て、慄いたクラスメイトは震えつつ開けた窓を閉めた。

「うー痒いつ……」

出来ることなら田を取り出して丸ごと洗浄したいくらいだ。痒みに耐え切れずに脩一は常時持つてゐる点眼薬を差して痒みが一時的でも収まるのを待つ。

「……死ぬかと思った……」

家では隨時回つてゐる強力空気洗浄機を学校にも持つてきたいく

らいだ。むしろ学校は全教室で空気洗浄機を配備してもいい。脩一並に花粉症を持つている奴だつているだらうし、そういうつた要望はどんどん出せばいいくらいだ。

冷暖房完備が第一優先になつてしまつのは脩一も重々承知であるが。

「おおっすー はよーー！ 朝から暑いのに窓締めきりちやつてどうしたんだよー」

豪快に教室の引き戸を開けて入つてくる少年が一人。自分の席に鞄を置くと窓を開けに窓際へ行く。これまた豪快に開けると青筋を上げたのは脩一だつた。鍵に手を掛けて、開けようとする少年の肩を掴むと脩一はニッコリと目だけで哄笑した。

口元はマスクで覆われており、目は花粉症のせいで充血しており、傍目から見なくとも近寄りたくない人間に指定されるだらう。少年はゆっくりと鍵を掛け直して、後ずさつた。

「てめえ、花粉症被害がもつとも酷い俺の目の前で窓を開けるなんていい度胸だ。俺からのスプラッシュ祭を受けたい強烈に残念な嗜好の持ち主だと思わなかつたな……」

「え？ え…？」

「あいにく俺には和英辞書しかなかつた。まさか辞書がこいついう形で役に立つとは思わなかつたな。覚悟おおおおおおおおーー！」

「ぎゃーーー！」

実はこの会話、GWが始まる前まで始業式からほぼ毎日繰り広げられるコントのようなものなので、クラスメイトは知らん顔もしくは「またやつてるよ」と苦笑いしつつ、誰も少年の擁護に回ることはなかつた。誰も火の粉を浴びることはしたくない。花粉症が苦しむこの時期は窓を開けずに、雨天の日を待ちにしているのは、こ

のクラスだった。

「孝樹も懲りないよなーウマとシカが一緒になつてゐる漢字の称号を持つていると胸を張れるのは孝樹だけだよなーー！」

ケラケラと笑う健を脩一は睨んだ。

脩一にとつては毎日清浄な空気を求めてゐるだけであつて、暑いのは脩一も同じである。だが暑いのと目と鼻が痒いのを我慢の天秤に掛けた場合、暑いの方が軽いのだ。

窓を開けないと新鮮な空気が入つてこないが、花粉入りの空気が入り込んでくるよりは脩一にとつては少しくらい濛々とした空気のまま授業を受ける方がよっぽどマシなのである。休み時間の数分間だけは泣く泣く空氣の入れ替えと称して、窓を開けざるを得ないが。

開けた瞬間にくしゃみ連発は四月からの恒例である。

脩一と毎日のコントを繰り広げているキングザおバカの称号を欲しいままにしているのが孝樹さきくもたかき前雲孝樹だ。空氣を一切読まないので能天氣キヤラとして確立されているが、クラスのムードメーカー的な役割を果たしているのも孝樹だ。

「それって褒めてるの？ 貶しているのかどっちなんだ…？」

「おお！ 意外や意外！！ いつもはこれ以上のことを言つてゐるのに全く反応ないくせしてこいつ時だけ反応するお前の野生的な勘が素晴らしいよーー 今から山へ行つてタケノコ取りに行つてくるがいいよー！」

パチパチと称賛の拍手を送つてゐるのが、ほとんど貶してゐるようなものだ。それを知つてか知らずか、孝樹は真に受けたようで、「タケノコ取りに裏山行つてくる！」と言つて、教室を出て行つてした。

孝樹は本気でおバカだ。

「前雲、お前何処へ行こうとしている。もうすぐホームルーム始め
るんだが」

一せんせー

首根っこを掴まれて、たらりと冷や汗を流している孝樹を見るのは楽しい。冗談で言つているのにそれを実行しようとする孝樹は純粋なのだろうが、純粋にもほどがあるほどの純粋さだ。

「今日は色々と忙しいんだ。お前にいちいち構つている場合じゃないんだ」

「せんせー酷くね？」俺も一生徒の一人なんだけど
「そうだったのか！」生徒じゃない気がして俺は自然に扱っていた
ぞ！！

がははと陽気に笑う担任に脩一はがつくりと肩を下ろすと、自分の席に着く。

「おはようだ！ 今日から新しい仲間が加わることになつたぞ！！
し・か・も美人ときた！！ わーい、皆に紹介するから入つてこ
いつ！」

朝練でぐつたりしている時に担任の声は聞きたくないが、気分を変えたい時に担任の声を聞くのは良い気分転換になる。

「高良入つて」一「い」

半ば投げやりに言いつつ、担任は廊下にいるであらう転校生を呼

んだ。ガラリと引き戸を開けてから真新しい制服に身を包んだ女生徒が教卓へ向けてまっすぐ歩いてくる。担任の横に立った女生徒は腰ほどまである長い黒髪を靡かせ、教室を見渡した。

チヨーク片手に担任は転校生の名前と振り仮名を黒板に書き、テンプレ通りの紹介を始めた。

「転校生を紹介する、高良或乃だ。高良、簡単な挨拶を頼む」「高良或乃と申す。私と仲良くしていただけないとありがたいな」

ふと顔を上げれば、さらりと腰くらいまで伸びた黒髪で少しきつめの瞳を持った少女が腕を組んで立っていた。

高飛車な声色に生徒は歓喜の声を上げる。

こんなド田舎に転校生、ましてや美少女とくれば誰だって喜ぶだろう。それがどこまで続くかが問題だが。

脩一はこの女生徒に見覚えがあった。

ガタリと立ち上ると、女生徒を指差して、叫んだ。

「お前、昨日のつ！ 何で此処にいるんだよつ！」

「なんだ、烟田、知り合いだったのか？ そうだ、高良の席は烟田の隣にしよう。高良も知り合いが隣の席なら不安になることも少ないだろうし。高良、烟田に何でも聞いてやつてくれよな」

「先生、何で俺が！」

「よろしく頼むぞ、この下僕が」

「高良ーいくら美人だと言つても下僕とか使っちゃいけませんつ！ でも可愛いから許す。俺を踏んでくれええええー！」

残念な性癖をクラスメイトに明かしてしまった事實を健が気付くのはもうちょっと後のこと。ひんやりと静まり返り、健の上下左右の席に座るクラスメイト達は僅かではあるが、席を離す。ガタガタと立てる音にようやく自分の犯してしまった失態に気付き、健は顔

を真っ赤にさせて机に頭をぶつけた。

「貴様には十一分」こき使つてやるから覚悟しておけ」

「ちょっと待つて。お前、足あつたのか?」

「……貴様の用はどうかしているのか。私がくり抜いて洗つてや
るつか? 少しはマシになるかもしだね」

「結構です!! つて何で手術道具持つてるの! 危険危険! 銃

刀法違反!!」

「はいはい、話す時間はたっぷりあるから休み時間とか放課後使つ
て話してね」

パンパンと手を叩き、どうにか教室の雰囲気を戻し、担任は途中
だつたホームルームを再開させた。

「おい、ついて来い」

「私に命令するとは頭が高いわ。お願ひしますからついてきてくださいと言えない至極残念な口しか持っていないのか」

「……今はどうでもいいだろうが、話したいことがあるから場所を変えたいと言つていいんだ」

脩一は或乃の腕を掴むと強引に教室から連れ出す。ぐちぐちと文句を言つのに対しては一切の無視を決め込んだ。屋上へ着くまでの一間、ほぼ全校生徒に見られていたような気がしたが、気にしないことにした。いちいち気にしていたら、脩一自身の身が持たないと思つたからだ。

「屋上の鍵なぞ、何で貴様が持つてているんだ。普通の生徒が持つているとは考えにくいのだが」

「鍵なんて持つてない。南京錠は針金でぎょちょっと動かせば簡単に開く仕組みになつてているんだよ」

脩一自身にも開け方は分からぬ。何となく鍵穴に針金を突っ込んで動かしてたら勝手に鍵が開いてしまつただけ。一度田は出来ないと脩一は思つていたが適当に動かしてたら開いた。深く考えずに鍵を開ければどうにかなる。むしろ、結果論重視。結果までの過程は関係ないというのが脩一の持論だつた。

適当に針金を動かせば、南京錠が開く。屋上の鍵の本体は職員室から拝借した時に合い鍵を作つておいた。つまり、屋上の鍵を持つていないと証明するためのダミーに近い。

屋上でも日陰になつている場所を選んで、脩一は腰を下ろすと或乃に座るよう促した。或乃は膝を抱えて座る。

「屋上なら誰にも話を聞かれる心配はないな。じっくり俺の質問に答えてもらひつからな」

「我から話すことはただ一つ。我的下僕となり、我的友達が望んだ願いを叶えるのだ」

「願いだと。願いを叶えるのはいいとして、何で下僕になる必要があるのかが俺には理解出来ないんだが」

「下僕になつた方が我にとつては都合がいいのだ。他の者達との兼ね合いもあるのだ。それくらい察しろ」

「でもお前の友達つてどんな奴らだよ……魑魅魍魎の類じゃないだろうな……」

「それ以外に何があるというのだ。魑魅魍魎ではなく日本古来有数の八百万の神々だぞ。神と魍魎の類と一緒にしないでほしいわ。神といえど、祟られても知らぬぞ」

「神も人も、今の高良は俺と変わらないじゃないか」

ちゃんと足あるし、と脩一が指差せば、当たり前だと或乃是鼻で笑い飛ばした。

「当たり前だ。本来ならば今日転校してくる予定だった女生徒に依り代を頼んで協力してもらつてはいる状態だからな。元々の我是実体を持たない存在だ」

「神様が実体を持つていたら大問題だよ。ということは今の高良はちゃんと存在している人間ということでいいのか？　お前が乗つ取つていて本当の高良は大丈夫なのか？」

「質問責めか。まあ、貴様も我的下僕となつたのだから知る権利はあるな。私は心優しいから答えてやつても良いぞ。本当の高良は元々病氣がちでな。我的所に拝みにきたついでに我と契約したのだ」「契約う？　お前と契約して彼女は無事なのか」

「だから我を悪霊の類と一緒に扱うな！！　私は由緒正しき神にあ

るのだぞ！？ 或乃是我が治すと決め、或乃もまた同意した正式な契約にあるぞ。神は契約を叶える義務があるのでからな！ 貴様が悩んでいるその花粉症も我は治すことが出来るのだぞ？！」

本当に悪靈だつたら拝みたくないし、下僕になるのも遠慮したいくらいだ。というのも、或乃と出会つた場所が家の物置であり、或乃自身は神だと自称していたとしても確証が持てないし、第一神と自ら名乗つてゐる時点で怪しさは限界点を突破している。

「花粉症は確かに治してほしいかも。でもなー花粉症は良い治療法とか見付かってるし。神様に頼んでも叶えたい願いはもつと豪勢なものじゃないともつたいたい氣がするんだよなあ」

滝のように流れてくる鼻を啜りつつ脩一は言つた。或乃本人が神である証拠はないし、半信半疑だった。

或乃という、通常では決して有利得ない存在に遭遇してしまったが、悪夢だったと脩一の中で決めつけている。もしかしたら、今或乃から要求されている「下僕」もまた夢の続きだと脩一は思つていた。

「意外にも欲を持つていたのか。寡欲だとばかり思つていたぞ。まあ、今から行く場所は花粉症の貴様には非常に酷な場所であるには間違いないのだからついでに花粉症は治しておこう。思考能力を欠いて行くと致命傷になりかねない」

「そんな危険な所へ行くつもりなのか！？」

素早い突つ込みを入れる脩一に或乃は溜め息を零した。

「花粉症という致命的なものを持つてゐる場合なら危険だ。行く場所は杉花粉がたわわに実つてゐる森の奥だからな」

「喜んで治してやれー」

脩一が頭を下げたのは無理なかつた。

「で、どこへ行くつもりなんだ。俺、これから部活あるんだけど」「部活は自主トレが基本だと健に聞いたぞ。自主トレの最中に済ませる場所にいるから安心したまえ」

「どうも信用出来ないんですけどー。俺をどこへ連れて行くんだよ」「旧校舎だ」「何でまた、そんな辺鄙な所へ行かなきゃいけないんだよ。旧校舎は出る」と有名なんだぞ！？」

旧校舎へ行きたくない理由がもう一つ脩一にはあった。旧校舎の裏手にはたわわに実った杉花粉の林が鎮座しているのだ。旧校舎へ行く用事はほとんどないが、脩一にとつては絶対に避けていきたい場所なのだ。鼻の粘膜の心配もそうだが、旧校舎は得体の知れない物体が出ることで有名だ。

夏になれば必ずどこかしらの部活が学校合宿の際に旧校舎で肝試しを行う。肝試しに去年参加したが、次の日原因不明の熱を出す生徒が続出した。もちろん、脩一もその生徒のうちの一人だ。

去年の一件以来、旧校舎は全面立ち入り禁止となり、来年の春に

取り壊しが決まっているのだが、決定した途端に教師が謎の怪我や病気を発症するようになり、生徒にも被害が出始めている。学校側は町でただ一つの神社の神主を呼んでお祓いすることになっていた。

その、旧校舎へ或乃は入ろうとしているのだ。或乃に手を引かれて、旧校舎の玄関前にやつてくると或乃はスカートのポケットの中から鍵を取り出すとドアの鍵穴に差し込む。ガチャリと音を立てて開いてしまうドアに、脩一は後戻りは出来なくなつたと思うのと同時にどうやって逃げ出そうか考えていた。

ひんやりとした空気が身体全体を包み込んで、脩一は家へ帰りたくなつた。今なら杉林を気にせずに全力疾走して家に辿り付ける自信さえもあつた。

「わかつた。貴様、幽霊が怖いのだろう。我を見て全く驚かなかつたのに情けない。幽霊でも悪靈とただの浮遊靈と分かれるが旧校舎にいる幽靈の割合は浮遊靈の方が圧倒的に多いから安心しろ。いざとなつたら我が貴様を守つてやるからな。そうだ！ 念のために貴様にこれを渡しておこうではないか！」

そう言つて或乃はスカートのポケットの中から水晶のブレスレットを取り出した。

その或乃の言う、浮遊靈が一般的に人間に悪さをしているんじゃないのかという愚痴を飲み込んで、脩一は或乃からブレスレットを受け取る。どこかで見た既視感に脩一は記憶の引き出しを搔き漁つた。そして見付けた。

「ん？ これ物置で見たことあるんだけど。もしかして祖父ちゃんの形見かなんかじやないのか？」

「ああ、貴様の祖父には世話になつたからな。これも我が与えたものだ。高価なものであるから大事に扱え」

「ひいい！ そこら辺に転がってる中学生にそんな高価な物を渡すんじゃねえよ！」

ブレスレットを持つてゐる手が震えてしまつ。震える片方の手を同じく震え続ける片方の手で抑え込み、脩一は頭ごなしに怒鳴り付けた。

「貴様の身の安全を担保する大事な物ぞ！ これは貴様の魂と思つて扱え！ とでも言へば貴様は大事に扱うのか？！ 粗末にするというならば我にも考えがあるぞ」

或乃から受け取つたブレスレットを手のひらに置いたままつたが、或乃はブレスレットを引っ取り襟元を引き寄せると手のひらをちょうど心臓の真上に置き何やら咳き始めた。

途端、胸が段々と熱を帯びていき、圧縮された光玉が脩一の身体から飛び出した。或乃がぎゅっと光玉を握り締めれば、心臓がしめつけられたように苦しくなり、脩一はその場に座り込み、悶え苦しんだ。

「ぐあつ！ 高良、お前何をした？！」

せいぜいと粗く呼吸を乱す脩一に対し、或乃は平然としたまま見下ろした。

「苦しいか。これは貴様の魂のようなものだ。本来具現化していないものだからな、貴様にも見えるように桃色に染めてやつたのだが、気に食わんかったか？」

「魂を握つて何がしたいんだ。漬したら俺はどうなるんだ。死ぬのか？」

簡単に漬してしまいそうなくらいに脆弱な光りを発しているそれに脩一は不安を覚えた。

「呆気なく三途の川を渡り、閻魔大王の下へと差し出されるだろうな。そうなつては我の頼みも出来なくなるし、こうして我が貴様の儂い魂を握つていれば貴様の魂は保障されたも同然。悪靈だろうが、他の神だろうが貴様の魂は渡されないから安心して我の手伝いに励むのだ」

「にぎにぎと脩一の魂を弄んでいる或乃に、脩一は怪訝そうに眉をしかめた。弄ぶ或乃にようやく脩一は或乃が握つているのは自分の魂である自覚が芽生え始めた。段々と呼吸がままならなくなり、ぎゅっと胸の服を握りしめて痛みを堪えた。

「いや安心出来ないって！！ 他人に自分の命を預ける！？ 僕とお前はまだ出会つてから数時間も経つていないじゃないか。そんな奴に自分の魂、ましてや人質を取られるなんて真似出来る奴の方がおかしいって」

「確かにそうだな。自分の魂を他人に預けるなんて我もしたくないし、預かっておきたくないわ。まあ、簡単に魂は抜けるものだと貴様が理解すればいいのだ。そうだな、貴様の魂の半分は我が預かる。貴様の魂は他の人間に比べると強固なものだからな。半分になつたとしても支障なく暮らせんだろうし」

握っている魂を分割すると或乃是半分を俺の身体に戻した。半分だけだが戻った安心感は計り知れない。だけど欠けているような感覚は残つたままだ。

「欠けた状態だと憑きやすくなつてしまつからな。もう半分は我的魂をやうつ。光榮に思え、神魂の半分を人間の貴様にやるのだからな」

或乃是自分の心臓の上に手を置き、顔をしかめながら魂を半分取り出す。

「ん……は、ああ……」

苦しそうに身体を弓なりに反らせながら魂を取り出す。顔は薄桃色に紅潮し、瞳を潤ませた姿はどことなく妖艶な色気を感じさせた。脩一は居心地悪そうに或乃から田線を自然体を装つて反らしたが或乃に気付かれてしまう。

「つ！ 貴様、そんな嫌らしい視線を我に向けるでないわ！！ この変態がつ！ 公然猥褻！」

「なつ、ばつ。ちげえし！ 高良が変な声を上げるのが……」

「ケダモノ！！ それ以上我を変態な視線で見たら貴様の魂なんぞ、閻魔大王送りにしてやるわ！ それか魔界に転送してサタンの奴隸にしてやるつー！」

もはや、日本限定だけの神だけではなくなつてしまつてきてしまつているが、そこまで或乃の頭が回つていらない証拠なのか。はたまた或乃のネットワークが八百万の神だけではなく天界や魔界にも影響を及ぼしているのか。影響があるなら脩一が取る行動はただ一つしかない。

「閻魔大王送りと魔界での奴隸だけは勘弁してください。俺は全う

に極楽浄土の世界に行つて輪廻転生してまた人間になりたいから

プライドも今は後回し。自分の身が可愛い脩一は振り返らずに或乃に土下座した。がつと或乃の踵が後頭部に入り、脩一は後頭部を押されて悶え痛みを凌ぐ。

「貴様はまだ理解しておらぬな。貴様の魂は我が半分握っているのと同じぞ。我は神であり、死なぬ。足らない貴様の脆弱な脳みそでも理解出来る簡単な式ぞ」

「つまり……」

或乃が言うのが真実というならば。脩一の脳内である式が浮かび上がるが否定したかった。

「貴様が考えるので合つてゐる。貴様は我と同じく神に似た存在になつたのだ！ 我は高貴な神の一員であるが、貴様は我的下僕。ちょ一つと身体と魂が人間離れしただけで普通の人間と変わりはせぬ」

「ちょ一つとだけじゃないだろ？ が！ 神の下僕になるなんてまつぱらひめん被りたいわ！ 戻せ」

「出来ぬ」

「は？ 馬鹿を言つるのは大概にしろ。戻せ」

ひくりと頬が吊り上がる。

「だから出来ぬと言つてるではないか！ 一度魂同士を繋げてしまえば元には戻らぬのだ！ 戻せたとしても貴様は死ぬぞ！ それこそ、閻魔大王に扱き使われるようになるわ！ 貴様の脳みそはそこまで回らぬ愚かな神経しか持つておらぬのか？！」

「ん？ 僕が死ぬつてことは或乃も当然死ぬつてことで間違いない

のか？」

「私は神ぞ。魂の半分が欠けたくらいで死んでたまるか」

胸を張る或乃。張るほどの胸がないため、薄っぺらい胸板を晒すだけだ。

「そうだよな……俺は人間で或乃是神様。神様が死んでしまったら人間に幸福を与えてやれないもんな。俺みたいな何処にでも転がつていそうな魂、神様にとつてはどうでもいい存在でしかないし。諦めるしかないが、死んだら死んだらだし？ 俺、こう見えても悪運強いし、旧校舎の中に入つてもちゃんと生き延びて帰ってきてやるんだからな！ いつか生まれてくるであろう息子や孫や曾孫や玄孫に言い聞かせるんだ！」

「どれだけ子だくさんで長生きしようとしているのだ。貴様の武勇伝を強制的に聞かされる孫や曾孫や玄孫の身にもなつてみろや」

或乃是はあ、と溜息を吐いた。未来への野望を強かに持ち、希望を抱いている脩一に或乃是嫉妬心を持っていた。或乃が憑いている『本来の或乃』の寿命がそう長くないのが原因の一つだが。

或乃の願いが叶えてしまつたら、或乃是この身体を離れなくてはいけない。神の魂は人間の身体には負担が掛かりすぎて、元々病弱な『本来の或乃』の身体では長くは持たないので。脩一と交わした契約が身体への負担を軽減させるために結んだ手段だ。

「いいじゃないか。旧校舎に入るのにはそれだけの勇気が必要だつてことだよ」

「ほん、遅しいじゃないか！　ナヨナヨしてゐから心配しておったのだ！」

「ナヨナヨ…今は花粉の季節だから思考もあまり働いてくれないんだよ。神様のお前には完全に無関係だろうがな」

或乃が持つてゐる脩一のイメージは酷いものだ。ナヨナヨしているのは季節限定だと脩一は思つてゐるので、この季節において全ての原因を花粉一択にしている。脩一は原因である旧校舎の後ろに鎮座している杉林を睨んだ。

「この憎たらしい杉め、滅びろ！」とバチ当たりなことを呴いているとトントンと後ろから肩を叩かれる。旧校舎という場所がいけなかつたせいなのか、脩一は思い切り叫んだ。

「ぎせああああああああああああああ！」

わんわんと辺りに脩一の絶叫が響き渡るが、脩一はそんなことを考
えている暇がなかった。それほどまでに驚いたのだ。

「うるわこのお。忙しない声を出して、一体どうしたところなのだ。奇声を上げるほど、貴様はチキンなのか」

隣にいた或乃の耳は脩一の絶叫を諸に受け止めてしまつたせいで耳の機能が一時的に低下し、波打つて聞こえていた。男なのに絶叫する馬鹿がいるかと脩一を罵りつつ、脩一の脛田掛けて蹴りを放つていた。脛の痛みを堪えて後ろを振り返ると、絶叫したことを後悔

した。

「そうだぞ、脩一！ 旧校舎へ入るつて何で俺に言つてくれなかつたんだよ！ こんな楽しそうなイベントを俺抜きで行おうとするなんて水臭いなあ」

「な、何だ… 孝樹と健だったのか。い、いきなり肩叩くんじやねえよ。驚くだろうが」

「脩一がこんなにも慌てるなんて久しぶりに見たわ。いやー良い物を見させてもらつたわ！」

ありがとうありがとうと言いつつ、孝樹は脩一の肩を叩く。ボケつとしている脩一の顔を見て、孝樹は首から下げる携帯で脩一の間抜け面を写真に収めていた。

ピロローンと携帯らしく間抜けな音で写真を撮られ続け、撮った画像を見ては一人は爆笑していた。或乃が「後で私にも送つてくれ！」と頼んでいる時に脩一はようやく我に帰つた。

「なあにしてんじや、すつとこどつこーい！」

「で。孝樹、何故竹刀を持つているのだ？」

怒る脩一を一切無視して、或乃は孝樹に訊いた。制服と鞄を持つている或乃と脩一の姿とは違い、孝樹と健は部活の中であるのが見受けられたからだ。

孝樹は胴着と袴を着ており、左手に竹刀を持っていた。足元は草履や雪駄ではなく、運動靴に素足。健もまたジャージと短パン、ランニング用のシューズを履いていた。

「インターバル中にひ、脩一と高良さんの姿を見かけて、寄り道してきたんだよ。健とは一緒に走つてたらまたま会つて一緒に練習してたんだよ。なー」

「ああ」

そこで脩一は一つの疑念を抱いた。健とはクラスメイトでもあるが部活が一緒なのだ。健の専門種目は長距離。孝樹は陸上競技会での種目は百メートルと言った短距離を選択していたはずだ。加えて健は県代表にも選ばれるほどの実力を持つている。自主練ではあるがタイムを計っているだろうインターバルで健が手を抜くはずがないのだ。

「健のスピードと孝樹のスピードでは明らかにおかしいと思うんだが。今日の練習メニューはインターバルはなかつたはずだろ」「…………立ち入り禁止の校舎に入ろうとしている転校生とクラスメイトの姿を確認しちゃつたら、何か悪いことでもしようとしているのかなーと学級委員長は考えちゃうのが本音よね?」「委員長?！」

ぐるりと振り返れば、学級委員長の楠木亜良来くすのわらいが立っていた。楠木の隣にいるのは隣のクラスで楠木の幼なじみである栢野木咲紀。ときのきさき二人とも脩一と健と同じ、陸上部に所属しており、こちらも自主練があるのにも関わらずいた。

「やうやく、楽しそうだなーと思つたら見過^{ハシカ}すわけいかないでしょー!」

「お前ら自主練はどうしたんだよ……」

「自主練なんてとつこの昔に終わらせたに決まってるでしょ！もうすぐ暗くなるし、陸上部に当たられているグラウンドには照明がないし。暗くなつたらスター^{タマ}ーの練習かインターバルかになるでしょ。ほとんど部員がインターバル走つてるよ」

サッカー、野球、ソフトボール、テニスとグラウンドのほとんど

を占領され、陸上部の練習する場所は近くの高校の第一グラウンドを利用させてもらうか、基礎体力作りで放課後の練習を終えてしまう場合が多く、個人トレーニングは休日の練習に回されることが多い。投てき種目や高跳び、幅跳びと言った種目は準備に時間が掛かるという理由から平日は基本的に基礎体力作りだ。脩一の専門種目は短距離なので、スタートーの練習と基礎体力作りで平日の練習を終える。無論、今日の練習メニューも基礎体力作りでインターバルを走り込む予定だった。

旧校舎に入り込む夕日の明かりで時間を忘れていたが、時計はもうすぐ十八時を差そうとしている。早く旧校舎の中に入らないと街灯がほとんどない中、自転車を漕いで家に帰らなくてはいけない。

「もうこんな時間なのか。出るには相応しい時間ではないか」「俺はさつさと帰りたいけどね」

「畠田君って意外にも怖いの苦手なの？ そういうや去年の肝試し参加してなかつたよね。怖かつたから係に回つたの？」

空笑いしか返せなかつた。

一見か弱く見える栢野木は、大のホラーやオカルト系が大好きで由緒ある寺社仏閣へ行つては話を聞くほどマニアだ。旧校舎へ入るつてことになれば、真つ先に彼女はやつてくるだろう。そして今、彼女は得体の知れないお札や数珠を手にしていた。

「怖いなんて男として恥ずかしくないの？ とんだチキン野郎ね」「…………」

ふんつと鼻で笑い飛ばす楠木に俺は何も言えなかつた。
オカルト系を一切信じてはいながら、テレビや他人の写真の中に映つているなら他人事だと思つて何の疑いもなく見る。しかし自分が関わるとなれば話は別だ。

「俺が怖いといつ言つたんだよ。去年はたまたま係をやる奴が不足していたから俺がやつただけで、旧校舎に入るつもりではいたぞ。たまたま先生に捕まつただけだ」「とか言つちゃつてー。本当は怖かつたんでしょー？」

語尾を伸ばして、栢野木は肘で俺の腹を小突いてくる。地味に痛い。

絶対に入りたくなかつたことがバレてしまえば、明日からの

いや今日からのあだ名はチキンになる。絶対にバレてはいけない。ニヤニヤと嘲笑する或乃が何かを言わんとしているのを俺は横目で捉えて、ぞつとした。或乃が何かしら変なことを口走るのは予想出来た。

「ああ、コイツはド級のチキンだからな。怖がつて入ろうとしなかつたから、この私が説得しようとしていたところなのだよ。何か脩一が入ってくれる言葉を掛けたらありがたいんだけどね」

ニヤリと口角を上げた或乃は『この私が』を強調して言つと、四人に頼んだ。

それと、チキンを強調するな。

「誰が怖がつたと言つたんだよ。科学的に証明されてない物体と関わりたくないと言つてるんじゃないか。高良が閻魔大王の下僕にしどもうだとか地獄へ落とすとか言つてるんだよ」

「脩一……何処か悪い所に頭を打ち付けたんだろう? 地獄だとか閻魔大王だとかそんな非現実的な妄想に付き合つてゐる暇はないんだ。さつさと旧校舎入ろうぜ」

「健、言つてることが矛盾してるよー? 旧校舎は非現実的ことがいっぱい待つてゐるというのにさ。否定しちゃったら……本当に出てきちゃうかもよ?」

口端を上げて、栃野木は脅し氣味に言つてくる。ぞつと背筋に何かが走った。

これから旧校舎へ入るうとしているのに追い打ちを掛ける忠告に、或乃以外の四人は顔色を悪くした。

「なあんてね! 本当に出てきたらビックリだけどもねー。私もホンモノはまだ見たことないから何とも言えないけど、本当に閻魔大

王さまが出てきたらサイン欲しい！ 助手の小野篁にも会つてみたい！」

「栎野木、篁はただのヘタレだぞ。下手な妄想を抱くと幻滅するわ」

（おいおい、お前は篁に会つたことがあるのかよ）とこわしあ「//
はしないでおこう。

或乃を本気にさせたら、俺が小野篁や閻魔大王と会つてしまつかも
しれない。それこそ失神する。魂抜かれてこき使われる。

「もー！ 栎野木じゃなくて、咲紀つて呼んで？ 私も或乃ちゃん
つて呼ぶから！」

「あつあつ或乃ちゃんだと！？ 尊い私の名前を敬称じやなくて友
達感覺で呼ぶのか！？」

顔を真つ赤にさせて抗議する姿が可愛いと思えてきた俺は、嘘だ
と頭を振った。

自分から尊いと言う人もいるのか。というか或乃は何の神様なん
だ。本当は名前もない魑魅魍魎の類じやないのか。

「いいじゃない！ せっかく友達になれたんだからさー！ で、さー！
或乃ちゃんは旧校舎へ何しに行こうとしたの？」

「……友達の願いを叶えるために行こうとしているのだ。だがチキ
ンの脩一が行くのを渋つてな……説得していたところだ。さつ、さ
つ咲紀からも頼んでくれぬか？」

「学年でただ一人旧校舎に入つてないんだよ！？ いつ取り壊され
ておかしくないのに！ こんな特別な機会めつたにないんだから進
んで旧校舎に入るべきだよ！？」

鼻息荒く語る咲紀に俺は一步後ずさつた。咲紀の勢いもそうだが、
熱心に語れるほどの魅力が旧校舎にあるとは到底思えなかつたのだ。

ましてや、靈といった超常現象の類は脩一は一切否定する立場を取つてゐるため、魅力どころか真つ先に家に帰りたかった。

この場の状況が悪夢だ。俺は自分の頬を抓る。鈍い痛みだけがじんわりと広がるだけだった。

「頬を抓つてどうしたのだ。これは悪夢でも何でもなく、現実なのだ！ ちゃんと現実を受け止めよ！ まだ旧校舎にも入つていないし、まだ視てもいないではないか！」

俺の腕を引っ掴んだ或乃は旧校舎へと一步を踏み出した。

「おお！ やすがに薄気味悪いな……」

電気の通つていらない旧校舎の中を一列になつて歩く。

先頭を歩くのは或乃。その次は俺。尻込みながら脩一は或乃の長い黒髪を一点集中して見ていた。左右に揺れる髪の毛を見ているだけで安堵する。

帰りたい気持ちは変わらないものの、冷静に或乃の後を追つていった。というのも俺が逃げないように或乃は腕を掴んだままであり、逃げたくても逃げられない状況だつた。

嬉々とした声を上げたのは健だ。怖い物知らずと言つたように彼はきょろきょろと周囲を伺い、何か変わつた物はないか確認しながら前を歩いていた。

「さ、さすがに怖いわね……」

「全く、これくらいで怖がつていてどうするのだ。これから会う奴は怖氣付いているのを気付かれたら即行自分の命が危険になると思え」

「そんな危険な人に会いに行くのかよ！ 命の保証が出来ないってどれだけ恐ろしい人なんだ……」

顔色を青白くし、握る竹刀の力が更に籠もる。

或乃の脅しに一番恐怖しているのは、実は俺自身だ。或乃に気付かれないように必死に隠しているのだが、或乃にはバレバレだつた。

「安心しろ、命の保証が出来ないのは脩一だけだ。他の者は私が守るが」

「何で俺だけ危険にならなきゃいけないんだよ！」

「私は皆の命を守るだけで精一杯だが、脩一は先程渡したブレスレットが作用して、私が守らなくともよくなつているのだ。何、貴様も女である私に守つてもらいたいのか？ とんだ腰抜けだな」

ふんと嘲笑してくる或乃に脩一はヒクリと頬を動かした。

恐怖もあつたが或乃に守られたくないというのは本音だ。出来るなら自分の命くらい自分で守りたい。

「彼女を待たせているからさつさと行くぞ。機嫌を損ねては面倒だ。私にも火の粉が飛んできかねない」

約束した時間は何時なのだろうか、そもそも人でないモノに時間指定なんてあるのかと疑問に思つたが聞かないでおこうと俺は決めた。

出来ることなら旧校舎に長居したくない。或乃以外、誰もいなかつたら今すぐにでも旧校舎を後にしている。

夕暮れ時の十七時すぎ。夜と昼が交錯する最も危険な時間帯なだと聞いていたから。

昼は陽の気が溢れ、人が活動する時間帯。

夜は陰の気が溢れ、魑魅魍魎といった人ならざるモノが跋扈する時間帯。

夕暮れ時はそんな人と魑魅魍魎が交錯し、魑魅魍魎と遭遇してしまえば神隠しに遭い、一度と人の生活する昼の時間帯に戻れないとされているのだ。

もう一つ、脩一には気がかりなことがあった。

昼夜の気温変動が激しい月は、山に入つてはいけないという言い伝え。

山の神が田の神、農作物の神へと変化する月に山へ一步踏み入れれば、現世に歸つてこれないという。季節の変わり目に遭難者が多い理由の一つがこれだ。

俺も魑魅魍魎と言つた類は信じないが、この言い伝えだけは信じていた。

神隠しに遭う前、必ずと言つていいほどに遭難者は一人の少女と会うのだと言う。

その少女は願いを叶えてほしいと言つたが、拒否すれば一度と現世に戻れなくなってしまうのだ。

まさかの空想が頭を過る。その少女が或乃といつ可能性だつてあつた。実際に或乃は俺に願いを叶えてほしいと言つてきたのだ。

偶然と言つていいのか、悪運が強いと言つた方がいいのか。俺には悪運だとしか思えない。

「着いたぞ、彼女はこの教室にいるのだ」

着いた先は音楽室だった。鳴つているはずのないピアノが鳴り響いている。

弾いている曲はベートーヴェンのピアノソナタ十四番月光第一樂章。

調律されているはずのないのに、狂いのない美しい旋律に耳を傾けてしまいそうになり、頭を振つた。

旧校舎は立ち入り禁止の措置が取られている。何人たりとも旧校舎に入れない。ましてや人間が入つたとしても音楽室へ行つてわざわざピアノを弾こうとも思わない。

「上手だね……と言つてもこんな田舎じゃここまで弾ける人なんて限られてくるんじゃないのかな」

ピアノ教室はあるが、ここまで上手な人がいれば小さな町のネットワークですぐに広まるはずだ。

俺が持つている人伝えのネットワークではピアノ上手い人はいなかつた。つまり、弾いているのは人間じゃない。

頭で考えなくても分かつてはいるはずなのに論理的に答えを導きたくなる。現実逃避をしていたのも山々だが、彼女の願いを叶えないと俺が神隠しに遭つてしまう可能性もあつた。

各人が恐怖している時、或乃はガラリと音楽室の引き戸を開け、

中に入る。

ありきたりな一重窓と防音対策の施された壁、上下に動く黒板。中央にはグランドピアノが置かれており、その前には制服を着た女生徒が座つて、鍵盤に指を踊らせていた。

「芙海ちゃん」

或乃が女生徒に声を掛ければ、芙海と呼ばれた女生徒が振り返る。顔色は青白く、三つ編みに結われた黒髪に眼鏡をかけていた。

「あら、或乃ちゃん。いらっしゃい」

驚いたことが一つあった。芙海には足があるのだ。幽霊の類なら足首から先は透けて見えるはずなのに。或乃といい、芙海といい幽霊の概念を壊しに来ているとしか思えない。

「ななな、何で？！」

大きい瞳を更に大きく極限にまで見開き、柄野木は指を震わせつ
つ訊いた。指差す先にいるのはもちろん、芙海である。

「どうしたのだ？」

芙海と或乃はこてんと可愛らしく首を傾げる。

「ど、どうして足が……」

「ああ、本来なら芙海は幽靈の一種だから見えないのだがな。ピア
ノが弾きたいといつ念から足のあるモノへと昇格したのだ」
「つまり？」

「幽靈から妖怪へとランクが上がったということか？」

健が一つの仮説を口にする。

「まあ、そういうことかしらね。幽靈だと不便なのよ。物質に干渉
出来ないからピアノ弾けないし、人に乗り移つて弾けたとしても指
が追い付かなくてすぐに腱鞘炎を起こしてしまっし。拳句、除靈さ
れそうになつてしまふし……不便だから願つたの。願つてこうして
ピアノを弾いているのだけども、地獄や中層界の人達はクラシック
に興味がなくて。教会を媒体にしている天界と違つて音楽を奏でる
ことを知らないのよ。だからあなた達が持つてている力を貸してほし
いの。特に畠田脩一君。あなたの力は重要なの」

「俺の力が？」

「こんな平凡を代表するような奴が芙海さんみたいな妖怪の力になるの？」

さすがに言いすぎだ。普通に過ごしていれば誰だって平凡人生まつしぐら。

或乃と出会わなかつたらファンタジーの世界に飛び込まなかつた。RPG世界だつたら間違いなく俺は主人公一味を横目で見ている名前もないようなモブだ。

「それがまたなるのだよ。脩一の家がどんなのが知つていいかい？脩一の家は私みたいな神や芙海みたいなこの世に未練のあるモノ達の相談を受けて、天界なり地獄なり中層界なり送つている家なのだ。証拠に脩一の家には祠があるだろう。あの祠が現世と別界との入り口なのだ。旧校舎もまた別界への入り口となつていてから魑魅魍魎の類が視えたりするのだよ」

「確かに祠はあるけども。両親は普通の一般人だぞ。家の守り神のようなモノだと思つていたのに……」

まさか家の敷地内に置かれている祠が重要な役割を果たしていたなんて知らなかつた。

そんな重要なモノが敷地内にあつてたまるか。
知つていたとしても絶対に近付かない。

「或乃ちゃん、旧校舎から別界へ行ける入り口つて何処にあるの？」

「別界なら今いるじやない。此処が現世の鏡体の反対側。だから旧校舎を壊してはいけないのよ」

「つまり……」

「既に別界に入り込んでしまつているということ。もちろん悪さをしたい妖怪や悪魔だつている。私はまだ下つ端だけども」

「聞いたことはないか？夕方の時間帯に旧校舎または陰気が集まる場所へ近付いてはいけないと。付近一帯の住民に布教するよう伝えたのだが如何せん、時間の経過には勝てなかつたようだ」「伝えたのは或乃つてことなのか……」

「脩一はどうやら知つてゐるようだな。私が説明するよりも現代に布教をしなかつた脩一が悪いのだから脩一が説明せよ」

「何で俺が布教しなきゃいけないんだよ！そもそも布教なんてしたら俺の思想が疑われるだろ？！」

「貴様の思想など関係ないのだ。布教していれば、貴様以外別界へ入り込むことはしなかつたのだ」

「何それ、旧校舎に入る前に言ってくれれば私達だつて諦めたかもしれないよ？」

栢野木が言つてほしかつたと肩を落とす。

栢野木の場合、言つたとしても嬉々として入つていつたに違ひない。

「では知つていたとして、仮定を考えてみようか。旧校舎に入つた時点で別界だと知つていたとしたら。入つた、入らなかつた？」

俺の問ひに四人は黙つてしまつた。

旧校舎に入るという前認識は好奇心が強く、肝試し感覚の軽い気持ち。

黙つた四人に或乃は大きく溜息を吐く。

「私は言つたじやないか。脩一は自分で守れるが、私が守らなくてはならないと。咲紀ちゃん達が私の傍から離れた時点で咲紀ちゃん達は現世に戻れないと思つてほしい」

じつと或乃の大きな瞳がじつと真剣な眼差しをぶつけてくる。

「ちょ、ちょっと待てよ。去年、この校舎を使って肝試しをした時は或乃ちゃんはいなかつたが、一人も欠けずに戻つてこれた。矛盾していないか？」

「ああ、簡単だよ。肝試し用に誰かが戻つて来れるように準備したのだろう。準備したとしても必ず綻びが出てきてしまう。何故か。答えは実に簡単なものだよ。この付近一帯の役目は脩一の家の者だからな。脩一の家族の誰かが準備しないと完全なモノとは言えない。五十年に一度、その綻びを直すために」

「つてことは何だ。その綻びとやらを直したいから協力しろってことか？ 本格的にRPGの世界に突入してしまったわけだ」

既に思考能力の容量は限界を超えてしまっていた。

「ところで全部で何か所くらいあるんだ?」

「別界と現世の封印は全部で五か所ある。火急的に修繕が必要な個所は二か所ほどだ。その二か所にいる奴らが厄介での。脩一人では攻略が難しいのだよ。

そこで、規定があるのだが、別界の秘密を知ってしまった者は強制的に修繕作業に協力しなければならないのだ

「は?」

「それってつまり……」

「俺らはパーティ組んで奴らと闘えつて」と?

「奴らってどんな人なんですか?!!」

田を輝かせて或乃に詰め寄るのは柄野木だ。怖い物知らずの彼女にドン引く。

「妖とか幽霊とか悪霊とかの類と思つてくれれば良い。奴らを軸として封印をしているからな。奴らをボカつと殴……違つた。氣絶させるという至極簡単な作業だ」

殴るとか物騒な言葉が出てきたが氣のせいか。氣のせいじゃないな。

「でも奴らって実体がないんだろ。どうやつて対抗するというんだ」「安心したまえ。道具は脩一の家に揃つている。ということで、来週末早速修繕しに向かうぞ」

拳を高らかに掲げて或乃は意気揚々と宣言した。

気分はガタ落ちだ。

田舎故の特性は、山の陰に隠れて平野部よりも日入りが早いことだ。

俺が住んでいる山間部にはほど近い集落も同じで、日の入りが早い時期であっても十八時にもなればすっかり日が落ちて暗くなってしまう。

日が完全に落ち、グラウンドを照らす照明が付けられ始めた頃、俺は体育館下の駐輪場にいた。グラウンドでは大会が近いのかソフトテニス部が熱心に練習している。

俺は日が落ち、自主練習のメニューも終わってしまえば部活も終わりという比較的楽な部に所属している。

なんとか校内案内を終えた俺は少ない練習時間ながらも、顧問から与えられたメニューと、プラスアルファ自分に課したメニューをこなす。普段よりメニューをこなせなかつた分、帰路で補おう。家は学校がある市街地から山一つ離れたところにある。毎日が登山。通学路がトレーニング。

ロードレーサー用の自転車と中学生が持つには少し高額な自転車だ。

ロードレーサー用の自転車を買つくりなら、電動アシスタンント付き自転車を買いたかった。

十六歳になつたら即行バイクの免許を取りに行くと決めている。高校もまた、崖を挟んだ反対側に一校ほどあり、卒業生の大半は一校のうちのどちらかに進学する。俺もそのうちの一になる予定だ。

自転車の鍵を外し、台から下ろして駐輪場を出る。校門を抜けると待つてるのは下り坂。軽くブレーキを効かせて、次の坂までの小休止。

今日の晩ご飯はなんだと思つ前に待つてるのは今日出された課題の数々。俺は提出日前日に焦つて始めた。課題が出た途端すぐさま取り組む。

週末はのんびり他の授業の予習をしたり、復習する。

五月末には実力テストが控えているので、苦手な所をマスターしておきたかった。

ご飯を食べた後、テレビを見つつ勉強するか。

自転車の回転音と虫の音、遠くでクマ避けに鳴らされる音をBGMにのんびりと自転車を漕いでいた。

「貴様っ！ 待た、ん…かつ…！」

この声が聞こえるまでは。

家までの道のりの中でも最難関である緩やかな三段の坂に差し掛かっていた。

アップダウンの激しい坂であれば、一気に体力を消耗するが下りは漕がなくていいので楽出来る。だが緩やかな坂だと、使う体力は倍だ。下りであっても漕がねば前に進めない。

聞こえた声を氣のせいだと思ったが、制止を求める声はまだ続いていた。

街灯の近くに自転車を止める。

普段なら家までノンストップで走り抜けた。普段を貫き通したかつたと自転車を止めて後悔した。身体が酷く重い。目蓋も身体も休息を訴えて、氣急を訴えていた。

「私が止まれ、と言つたらつ！ 止まるのが、当然であるつへー。」

息絶え絶えに訴えてくる。

「何で止まらなきやいけないんだ。俺はさつと家に帰つて待つている美味しい晩飯を食べるんだよ」

「だから、私も一緒に帰るから自転車の後ろに乗せていいと言つているのだ」

「…………」

ただ帰る方向が一緒なだけだ。だがこの先の道にあるのは数件の家しかない。

ウチの近所で俺と同い年くらいはいなし、最近越してきたという噂も聞いたことがなかつた。

一体或乃是何処に住んでいるのだろう。

などと、考えたものの夜が深まるだけだ。帰り路を急いでいるので、これ以上留まるのは精神安定上非常によろしくない。

俺は怠い足を叱咤し、サドルに跨り自転車を漕ぎ始める。

ペダルを踏む足に力を込めた。これから挑む坂に疲れから普段以上の気持ちを持つて望まないと挫けてしまいそうだったから。

途中で挫けてしまったとしても、家には帰らないといけない。

携帯電話を持たされていなかったし、持っていたとしてもこじら

辺は電波状況が最悪だ。迎えを呼ぼうにも呼べない。

疲れていたとしても、今は自転車を漕ぎ続けるしかないのだ。

「待てと言つていいのだ！ 私を置いていくでない！」

後ろから聞こえてくる或乃の声は一切無視だ。

「……か、或乃は此処まで走ってきたのか。此処まで何キロあると思っているんだ。魑魅魍魎の類だから関係ないか。」

下りがなく、登りが三段に渡つて続く坂の三段目に差し掛かつてきた頃、俺は後ろを確認した。或乃はまだ走っている。

スピードを緩めると或乃は追い付いて、自転車と同じ速度で坂を上り始める。

「……で、何でお前は俺の後をついてくるんだよ！ 自分の家に帰れよー！」

「家はこの近くにないのだ。」の身体の持ち主はこの街から結構離れている所に在住しているのでな

遠回しに言う或乃は一抹の不安が過つた。

「もつと簡単に説明するとなんだ」

嫌な予感しかしなかった。

「脩一の家に泊めろ」

「『り』と言う或乃に俺は頭痛がしてきた。ようりと自転車が傾き、体勢を持ち直す。

「何で同級生の女の子と一緒に暮らさなきゃいけないんだよ！ 意

味が分からぬ……」「

もつ少しで下りだ。

「もともと私はあの家に住んでいたのだから私の家でもあるのだ！別に住んでも構わないだろうよ。なあに安心したまえ！思春期の初心な少年が関わるあんなことやこんなことに興味関心を持ち、あらぬ方向にぶつ飛んでしまうのは良いことだ。せいぜい今のうちに黒歴史を重ねるのだな！」

「うわあ！！」

ガシヤリと或乃が後ろの荷台に乗つてくる。二人分の体重でぶれる自転車を持ち直す。

後ろに誰かが乗つてくるなんてまずなかつたから緊張した。

緩やかな登りが終わり、下りに差し掛かつた。

下りになれば家まであと少し。登りもなく、あまり漕がずに家まで辿り着く。

「間抜けな声を上げてなんだ。だらしないな。さつさと家まで漕ぐのだ」「

ふわりと或乃の髪の毛から漂つ匂いに俺はつい顔を赤らめた。

シャンプーの匂いなのか体臭なのか甘酸っぱ匂いがする。花粉のせいで鼻が詰まっているはずなのに良い匂いだけは通す鼻に、俺は賞賛したくなつた。

詰まつてなければ、もっと良い匂いを嗅げたかもしれないのこと少しだけ悔やんだ。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとっています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n5538s/>

物体Aの職務

2011年12月27日21時51分発行